

氏 名：窪 田 光 枝

学 位 の 種 類：博士（看護学）

報 告 番 号：甲第111号

学 位 記 番 号：博第108号

学位授与年月日：令和5年3月15日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論 文 題 目：発見時に進行がんと診断された患者の治療と生活に関する経験

Experiences of Patients Initially Diagnosed With Advanced Cancer Regarding Treatment and Everyday Life

論 文 審 査 員：主査 遠 藤 公 久

副査 吉 田 みつ子（正研究指導教員）

副査 田 中 孝 美（副研究指導教員）

副査 守 田 美奈子

副査 太 田 喜久子

論文審査の結果の要旨

審査の概要

がん治療は飛躍的に進歩し、根治を目指した治療が困難な進行であっても、分子標的治療薬や免疫チェックポイント阻害薬、遺伝子診断による薬剤選択などによって、長期間にわたってコントロール可能となってきた。一部の進行がんでは、生存期間が4年を超えるまでに延長している。しかし、その延命の効果に脚光が当てられる一方で、不確かな中で治療を継続する患者がどのように過ごしているのか、どのような支援が求められているのかについては、十分に明らかになっていない。

このような背景のもと、本研究は発見時に進行がんと診断され根治的治療の適応外となった患者の経験が、治療と生活について焦点を当て、当事者の視点から明らかにしたことは、非常に意義があると評価された。

本研究は質的記述的研究デザインにより、関東圏内にある1病院に通院し、診断時に治癒が困難な肺がんと診断され、進行抑制を目的とした治療を受けている患者6名を研究参加者とした。インタビューは一人につき、約3回行われ、研究参加者毎に分析し、テーマが見出された。病気になった悔しさと情けなさを抱えながら日々を積み重ねる参加者、病気との距離を保ちつつ新しい生活へと踏み出そうとする参加者、考え方を変えて生かされる時間を生き抜こうとする参加者、将来の先がないという恐怖の中で時間だけを持って余しているという参加者など、診断後の参加者の治療経過や病状は多様であり、治療経過や病状の変化に合わせて死の切迫感の強さや生の有限性の受けとめが変動する経験が記述された。治療によるがんの進行の抑制、現状維持が続くことが、参加者にもう少し生きられそうだという希望をもたらす一方で、死の切迫感が常にあり、生存期間が延長しても、将来への展望や目途をもてずにいる姿が明らかにされた。しかしながら参加者は、閉塞感の中にあっても、治療や病気を日常生活から分けし、毎日を丁寧に暮らし、日常を積み重ねていくことで、生きているという実感をもち、先にも後にも進めない現状維持という状況を生き抜いている姿も明らかにされている。

審査の結果、特に研究参加者の経験の記述に説得力があり、患者との信頼関係を築きながら当事者の経験に迫れていることが高く評価された。

本研究はこれまでに明らかにされてこなかった進行がん患者の治療と生活の経験について重要な知見を示している。特に看護が療養生活を支援する上で、日常生活の中で、日常を積み重ねて生活することの重要性が明らかになった点は、本研究の新規性であると評価された。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。